

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
8月	1,310	946	1,048	17	2	3,323	1,397	40	217	230	122	912	6,241
累計	5,716	3,958	4,228	691	32	14,625	5,874	222	1,072	1,016	582	4,994	28,385

INF：インフォメーション・カウンタ REF：レファレンス・カウンタ BM：自動車図書館

📁 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

I/M1 市川市の世帯年収が町丁別、もしくは地域別にわかるような資料はないか。

『市川市統計年鑑 平成 31 年版』（市川市総務部総務課 2019）や中央図書館所蔵の『国勢調査報告 平成 27 年』などを確認したが、世帯年収や世帯所得が掲載されているものはなかった。また、『都市データパック 2019』（東洋経済新報社 2019）p. 505 には、市川市の「納税義務者 1 人当たりの所得」のみ掲載されていた。さらに、『個人所得指標 2019』（ゼンリンジオインテリジェンス 2019）（県立中央図書館所蔵）p. 58 で、世帯当り所得及び一人当たりの所得として平均所得の掲載が確認できた。

Web で閲覧できる政府統計 e-Stat (<http://www.e-stat.go.jp> 2019. 8. 8 確認) の「統計データをさがす」の「キーワード検索」に「世帯所得」「市川市」を入れて検索したところ、「就業構造基本調査 平成 29 年就業構造基本調査主要地域編」がヒットした。この調査の対象は全国、都道府県、県庁所在都市、人口 30 万人以上の市、県内経済圏を世帯単位で見た統計表となっている。表題「世帯所得、一般・単身世帯別世帯数（全世帯）」の統計表から地域区分「市川市」を選択すると、世帯所得が 999 万円までは 100 万円ごと、1000 万円から 1999 万円までは 250 万円ごと上限は 2000 万円以上で世帯総数、一般世帯、単身世帯の世帯数がわかった。また、同調査の表題「男女、所得（主な仕事からの年間収入・収益）」では世帯別ではないが、299 万円までは 50 万円ごと、1000 万円から 1499 万円までは 250 万円ごとで上限は 1500 万円以上の個人所得の総数がわかった。e-Start で閲覧できる統計が市川市の世帯所得としては詳しいが、町丁別まで掲載されている資料は図書、Web でも探すことはできなかった。

Z/N 永井荷風は終焉地となった市川になぜ転居してきたのか。荷風本人の著作や評伝などで何か記載はないか。

以下の資料から荷風の市川への転居についての記載を確認することができる。

『荷風ノ散歩道』（市立市川歴史博物館 1990）p. 5「そして九月、従兄の杵屋五隻（大島一雄）が疎開していた熱海の木戸正の家に落ち着いた。しかし、ここでの生活も長くは続かず、翌昭和二年一月、杵屋一家と共に市川の菅野の借家に移り住んだのである。」

『荷風と市川』（秋山征夫／著 慶應義塾大学出版会 2012）p. 21「（前略）家主の木戸から、この別荘を再び旅館として営業したいとして、年も押し詰まって荷風と杵屋一家は立退きを言い渡される。そこで、五隻が急遽、探し出したのが千葉県の子川の借家であった。年の暮れに引越し作業を始めた荷風は、昭和二年一月一六日、杵屋五隻とともに市川に移ってきた。『日乗』にはこのあたりの詳しい記述はなく、彼の考えもわからない。」

『荷風晩年と市川 1946～1959』（橋本敏男／著 斎書房出版 2012）p. 62「この借家探しについて、養子の永井永光さんは次のように話す。「菅野の住まいは、兄・成友と国府台高等女子学校（現・国府台女子学院）の創始者である平田華蔵さんの娘さんとが、上野音楽学校（音大）で

友人であったことから、先生（荷風）を連れて困っていると相談したところ、借家が六軒あるので、そのうちの軒（菅野三丁目）を提供してくれる、ということになりました。（中略）このとき、荷風六十七歳。」

また、『荷風晩年と市川 1946～1959』には併せて、荷風の『断腸亭日乗』からの引用として、引越し初日はトラックが到着しないというトラブルに見舞われ、さらにその翌日に到着したトラックの荷物の一部が盗まれたという散々な引越しだった様子が記載されている。

913.6 白石一郎が書いた『堤算二郎金銀山日記』が読みたい。

資料検索でタイトルや著者で検索するがヒットしないため、各種資料検索をするが該当はなかった。

利用者が示した『東海道をゆく 十時半睡事件帖』（白石一郎／著 講談社 2006）p. 326-349の年譜中、p. 348に「平成十三年 二〇〇一年（中略）十一月、『堤算二郎金銀山 第一話刀財布』を小説すばるに発表。（後略）」の記載があったため、中央図書館所蔵の『小説すばる』（集英社）2001年11月号p. 60-75に当該作品を確認した。以降、この年譜により第二話は同誌2002年2月号p. 242-256、第三話は同誌2003年1月号p. 236-252（冒頭に「作者都合による休載から一年、シリーズ待望の再開！」の表記あり）、第四話は同誌2003年4月号p. 226-239、第五話は同誌2003年7月号p. 364-379に掲載が確認できた。第五話の章末に「※第六話は10月号に掲載予定です。」の予告があったが、その後の作品掲載の記録は確認できず、年譜の平成16（2004）年の欄に「九月二十日午後五時五十五分、肺炎のため福岡県久留米市の病院で死去」の記載があった。

以上の状況からこの小説は未完であり、現在のところ1冊にまとめた資料として刊行されていないと推察される。

他にもこんな質問ありました（クイック・レファレンスから）

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など
I/F 1	昭和29年の市川市の産業別人口数が知りたい	⇒ 『市勢要覧 昭和31年版』（市川市役所 1956）p. 6に昭和25年国勢調査による産業別人口として、男女別、農業、林業など未就業者を含め14区分で産業別人口が掲載されていた。また、『市勢要覧 昭和33年版』（市川市役所 1958）p. 10-11に昭和30年10月国勢調査による産業別就業人口として、当時の市町である市川市と南行徳町別の第一次産業から第三次産業別の人口数が確認できた。しかし、いずれも5年ごとの国勢調査による資料となっているため、昭和29年の産業別人口は確認できなかった。
778.2	人形師の安本亀八について知りたい	⇒ 資料検索したがヒットせず。県立横断検索で「安本亀八」で検索すると『美術手帖』2016年3月号がヒット、p. 82に作品が、p. 84に安本亀八について簡単な紹介があった。この紹介文の中の「生人形」をキーワードに再度資料検索した結果、『江戸のバロック』（谷川渥／監修 河出書房新社 2015）がヒット、p. 122-123に作品が、p. 125に略歴が記載されていた。
850	タタミーゼに関する書籍はないか	⇒ Google検索をすると、ウィキペディアに「タタミゼ」の項目があった。そこに参考文献として『情報・知識 imidas 1997 別冊付録 カタカナ語・欧文略語辞典』（集英社）が記載されており、この資料のp. 165に「タタミゼ [tatamiser 仏] 畳の上の暮らしという意味で、椅子を使う生活から床でくつろぐ生活への様式の変化をいう。フランスでの造語。フロアライフとも。」の内容が確認できた。また、『パリジャンは味オンチ』（ミツコ・ザハー／著 小学館 2009）p. 20には「タタミゼ（日本趣味の人）」との記載があった。